

# 第12回肝臓病教室

このたび、第12回肝臓病教室が平成26年2月18日に開催されました。今回も14名の受講者にお越しいただきました。今回の肝臓病教室のテーマは、「C型肝炎」です。

まず、竹谷医師より「新しい治療について」の講演がなされました。

インターフェロンの効果に影響する因子は、血中ウイルス量、サブタイプ、年齢、性別、肝臓の線維化の程度があります。効きやすい人は、ウイルス量が少なく、ジェノタイプ2a/2b、男性で線維化が軽度の人です。しかし、日本人ではジェノタイプ1bが70%を示しています。その治療として、最新の治療薬ペグイントロン+リバビリン+シメプレビルで80%強の著効率があります。ですが、インターフェロンを使わずにC型肝炎が治療する時代がすぐそこまで来ています。詳細は専門医にご相談して下さいとお話されました。

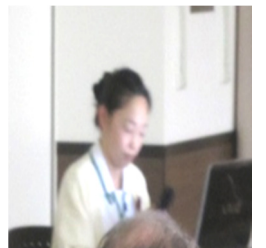


続いて、北田薬剤師より「新薬の紹介と副作用」の講演がなされました。

インターフェロン治療とインターフェロンを使用しないインターフェロンフリーの違いを説明されました。将来は、インターフェロンを使わないインターフェロンフリーの治療法が第一選択になると考えられます。しかし、インターフェロンフリーをむやみに使うことは、薬剤耐性を広げる恐れがあるので、現状ではインターフェロン治療をお勧めしますと話されました。



続いて、小村看護師より「IFNの副作用とその対処法」について講演がなされました。C型肝炎の治療でIFNを使用すると、初期症状としてインフルエンザ様症状がみられます。熱が出る、頭が痛い、体がだるい、関節が痛いなどです。程度に応じて解熱剤などを併用して対処します。中期になると、体にかゆみが出てきます。この場合はステロイド軟膏や抗ヒスタミン剤を併用して対処します。また食欲低下、貧血、血小板減少などがでてきます。程度に応じて薬剤の減量や中止なる場合もあります。後期では脱毛や目の症状などがでてきます。特に注意しなければいけない副作用は咳がでる、息苦しいなどの症状がでる間質性肺炎や気持ちが落ち込む、眠れないなどの症状が出るうつ症状です。このような症状が出たらまずは主治医に相談していただくこと。また、まわりの家族も気づいたら早めに病院につれていくこと、見守りが大事であることを話されました。



最後に藤本管理栄養士から「鉄制限食のポイント」の講演がなされました。

C型肝炎になると肝臓に必要な以上の鉄が蓄積され、有害な活性酸素が発生し肝機能の悪化につながります。そのため、食事では鉄制限食が大事になってきます。一日5~7mg程度に抑え必要があります。魚食やビタミンCは鉄の吸収を助ける役割があり、ビタミンCを多く含む果物は間食で摂取する方がよいと説明されました。鉄過剰に注意する人は、主菜を2種類取っている人、肉と魚と大豆と一緒に摂取している人は1種類にすることやサプリメントをとっている人は表記をきちんと確認し、判断するようアドバイスされました。まずはバランスのよい食事を心がけることが大事であると話されました。



消化器内科では、定期的にさまざまなテーマで肝臓病教室を開催していく予定です。今後の予定につきましては、院内掲示や当院のホームページでご確認下さい。

